

モハメド・バハルの追悼

モハメド・バハルは、ガザ市の人団地であるシュジャイーヤ出身の24歳のパレスチナ人男性でした。彼はダウソ症を持って生まれ、自閉症とともに生活しており、これらの状態が彼の家族への依存と、穏やかでほとんど非言語的な態度を形作っていました。友人や近隣住民は、彼を静かな存在として覚えており、窓辺に座って通りを行き交う人々を眺めるのが好きで、大きな音に簡単に怯え、両親の安心させる声に頼っていました。

騒音、恐怖、爆発が日常的な地域で、モハメドの沈黙は彼の避難所であり、両親の責任でもありました。彼らは彼を世界の残酷さから守るために人生を捧げていました。彼は政治的ではありませんでした。戦闘員でもありませんでした。彼はただ、ケアと優しさが必要な人間だけです。そして、悲劇的に、彼の死の瞬間にはそのどちらも得られませんでした。

彼の死に至る状況

2024年7月3日、イスラエル兵がシュジャイーヤに突入しました。彼らは装甲車両、ライフル、そしてオケツ部隊の軍用犬とともにやってきました。バハル家のアパートに押し入ったとき、モハメドは恐怖で凍りつきました。彼は叫ばれた命令を理解できず、周囲の混乱をほとんど処理できませんでした。数秒のうちに、兵士たちは犬を放ちました。目撃者と彼の両親は、動物が彼の腕と胸を引き裂いたことを思い出し、小さな部屋は彼の叫び声で響き渡りました。母親は彼に近づこうとしましたが、兵士たちに引きずり戻され、父親は壁に押し付けられました。その後、彼らは手錠をかけられ連れ去られ、息子が床で血を流している中、家を強制的に去らされました。

数日間、両親は拘束されていました。ようやく解放されたとき、彼らは破壊された通りを急いで戻り、息子の残骸を見つけました。腐敗した遺体、コンクリートのひびに溜まった血、かつて彼が窓から世界を眺めていた場所に漂う死の臭い。彼らは彼を洗い、埋葬しましたが、戦闘のさなかでは公式な助けを求めることが出来ませんでした。

脆弱で、障害があり、依存していた人間の命が、記録も悔い改めもなく消滅し、放置されました。

3. IDFにおける犬の使用に関する不安な歴史

モハメドの殺害は孤立した事件ではありません。それは不安なパターンの一部です。イスラエル軍によるパレスチナ人を脅し、傷つけ、屈辱を与えるための犬の使用が記録されています。

- B'Tselemの2015年の報告書「犬が噛むとき」では、オケツ部隊の犬が逮捕作戦中に非武装の市民、子供を含む者を攻撃した事例が記録されています。この組織は、この行為が残酷で非人間的かつ屈辱的な扱いに相当すると結論付けました。

- **Breaking the Silence**、元イスラエル兵のグループは、犬が拘束者を恐怖に陥れるために使用された証言を公開しています。兵士たちは「彼らの顔に向かって吠えさせる」よう命じられたり、縛られたパレスチナ人を犬に噛ませたり引きずらせたりすることが許可されていました。
- **HaMoked**および**人権のための医師団-イスラエル**は、拘束者からの宣誓供述書を収集し、尋問室に犬が連れてこられたことが屈辱の手段として使用されたと述べています。
- **国連拷問禁止委員会 (CAT)** および**ヒューマン・ライツ・ウォッチ**は、このような文脈での犬の使用について懸念を表明し、こうした方法がイスラエルの国際法上の義務に違反すると警告しています。

一部の証言は、**屈辱の場面**があまりにも深刻で、身体的および心理的拷問の境界を曖昧にするものだと描写しています。犬が縛られた囚人の近くで食事をしたり、排尿したり、性的支配を模倣したりするよう強制されるなどです。すべての主張を独立して検証することはできませんが、**屈辱と非人間化のパターン**は、長年にわたる報告で一貫しています。

この観点から、モハメド・バハルを殺した攻撃は異常ではなく、**制度的な慣行の恐ろしい結末**でした。それは、制御と恐怖を強制するために人間の動物に対する恐怖を武器化するものです。

4. イスラエル/軍事法の下での免責のシステム

イスラエルの法制度内では、**パレスチナ人は正義を求める道がほとんどありません**。占領地での兵士によるすべての申し立てられた違反は、**IDFの軍事検察総長 (MAG)** の管轄下にあり、民事裁判所ではありません。

MAGが単独で調査を開始するかどうかを決定し、ほぼ常に拒否します。**Yesh Dinの2023年の統計**によると、2019年から2023年までの数百件のパレスチナ人の苦情のうち、わずか0.7パーセントが起訴につながりました。**80パーセント以上**は調査もせずに却下されました。

パレスチナ人の被害者は直接刑事告訴を提出できません。彼らはイスラエルのNGOに頼って代理で請願する必要があります。移動制限、言語の障壁、軍事システムの透明性の欠如は、参加をほぼ不可能にします。民事訴訟さえも阻止されています。イスラエルの**民事不法行為法 (2012年)**の改正により、州は「戦闘ゾーン」で発生した損害に対する責任を免除されています。

この免責の構造は、誤った行為で告発された機関が自身を調査するかどうかを決定することを意味します。モハメド・バハルの場合—他のほとんどの場合と同様に—調査は開始されず、兵士は尋問されず、責任は追求されませんでした。

5. 国際法の下での影響

国際人道法 (IHL)、国際人権法 (IHRL)、および国際刑事裁判所 (ICC) のローマ規程の下で、モハメド・バハルの殺害は**戦争犯罪およびジュネーブ条約の重大な違反**に該当する可能性があります。

a. ジュネーブ条約

- **第四ジュネーブ条約の27条および32条**は、暴力、脅迫、屈辱的待遇から民間人を保護することを保証します。
- **共通の第3条**は、「生命および人に対する暴力、特にあらゆる種類の殺人、切断、残酷な扱い、拷問」を禁止します。
- **第16条**は、締約国に負傷者および病人をケアする義務を課します。障害のある民間人を治療されない傷で死なせることはこれらの義務に違反し、**第147条**の下で「故意の殺人」として分類され、重大な違反となります。

b. ローマ規程 (ICC) 第8条(2)(a)(ii)および(iii)は**故意の殺人**および**非人道的扱い**を戦争犯罪として定義し、第8条(2)(b)(xxi)は**個人の尊厳**に対する**侮辱**を禁止します。意図的であることが証明された場合、非戦闘員に犬を放ち、援助を拒否する行為はこれらの要素を満たします。このような行為の繰り返しパターンは、第7条(1)(f)および7(1)(h)の下で**人道に対する罪**の閾値に達する可能性があります。

c. 人権条約 イスラエルの**市民的および政治的権利に関する国際規約 (ICCPR)**、**拷問禁止条約 (CAT)**、および**障害者の権利に関する条約 (CRPD)** の下での義務は、拷問、恣意的な生命の剥奪、差別を禁止します。モハメドの障害は、CRPDの第10条（生命の権利）および第15条（拷問からの自由）に基づいてこの事件に特別な重みを付与します。

d. 指揮および国家の責任 慣習国際法および**ローマ規程の第28条**の下で、指揮官は虐待を知っていた、または知っているべきであり、それを防ぐか処罰できなかった場合、刑事責任を負う可能性があります。国家としてイスラエルは、違法な行為および調査の失敗に対する責任を負います。

これらの枠組みを総合すると、**モハメド・バハルの死**は国際法の下での違法な殺人であることに疑いの余地はありません。

国際的な反応

モハメド・バハルの死のニュースは、人道支援および障害者の権利のサークルに波及しました。

- **ダウン症インターナショナル**は、「深い衝撃と悲しみ」を表明する声明を発表し、この事件を「障害者の人間の尊厳と生命の権利に対する恐ろしい侵害」と呼びました。
- **イスラム・リリーフ・ワールドワイド**は、殺害を「心を痛めるもの」と非難し、**独立した国際調査**を求めました。
- **国連障害者の権利特別報告者**は、紛争地域での障害者の深刻な脆弱性の象徴としてこの事件に言及しました。
- **ガーディアン、ル・モンド、およびハアレツ**の調査は、彼の死を民間地域でのIDFの攻撃犬の使用に関するより広範な調査に結びつけました。

しかし、非難を超えて、どの国家や国際機関も責任追及を追求していません。正義の不在は、パレスチナ人の命—特に最も脆弱な人々の命—が彼らを守ると主張する国際秩序によって保護されていないという感覚を強化します。

最も暗い章の反響

モハメド・バハルの死の完全な道徳的重さを理解するには、ガザを超えて、歴史の暗い鏡に目を向ける必要があります。

障害者を死に追いやった殺害は、人類の最も暗い歴史を思い起こさせます。かつてそのような命を無価値とみなした優生学イデオロギー、障害者を絶滅させたナチスのアクションT4プログラム、異なる者を抹消した植民地および制度的な残酷さ。

兵士が犬に防御できない者を引き裂くよう命じができるとき、それは同じ古い非人間化的論理を復活させます—一部の命はそれほど重要ではないという。歴史は、社会がこの信念を受け入れると何が起こるかを警告してきました。

神聖なものの侵犯：ユダヤの道徳法と命の価値

モハメド・バハルの悲劇は、ユダヤ教そのものの道徳的心臓をも傷つけます。その命の神聖さに関する教えは、人類の歴史の中で最も古く、最も妥協のないものです。二つの基本原則—ピクアハ・ネフェシュとビツェレム・エロヒム—は彼の死の状況を単なる人道的な怒りだけでなく、ユダヤの倫理法の深刻な冒涜にします。

ピクアハ・ネフェシュ - 命を救う義務

ユダヤ法では、ピクアハ・ネフェシュは一つの命を救うことがほぼすべての他の戒律に優先すると定めています。タルムードは教えます：「一つの命を救う者は、全世界を救ったも同然である。」シャバットでも、ほぼすべての労働が禁止されているとき、危険にさらされている者を救うために法を破らなければなりません。傷ついた者—誰であれ—を無視することは、この神聖な義務を破ることです。

モハメドを出血したまま放置した兵士たちは、国際的な規範だけでなく、彼ら自身の宗教的伝統のこの中心的な戒律も破りました。ピクアハ・ネフェシュによれば、彼らは彼に援助を提供し、何よりも彼の命を保つ義務がありました。彼を放棄することは、暴力行為であるだけでなく、ユダヤの道徳的言語ではヒルル・ハシェム、神の名前の冒涜でした。

ビツェレム・エロヒム - 神の像に

創世記の冒頭から宣言が来ます：「そして神は人類を彼の像に創造した。」この考え—ビツェレム・エロヒム—はユダヤの倫理の基礎であり、それを通じて現代の人権法の基礎です。それはすべての人間が、国籍、信仰、障害に関係なく、神聖な尊厳を持つことを肯定します。

防御できない者に犬を放つことは、この像を否定することであり、神聖な火花が一つの民にのみ存在し、別の人には存在しないかのように振る舞うことでした。このような思考は、まさに預言者たちが非難したものです。イザヤの叫び—「悪を行うのをやめなさい。善を行うことを学びなさい。正義を求め、抑圧された者を救いなさい」—はすべての命に神聖なものを認めるこを要求します。

したがって、モハメド・バハルを殺した行為は、人道法だけでなく、ユダヤの道徳的伝統の最も深い戒律も破りました。それは、命の保全が国境を越えると主張し、どんな人間に対する残酷さも創造者への侮辱であるという信仰を裏切りました。

道徳的清算

迫害の記憶を持つ民にとって、道徳的命令はこれ以上明確ではありません。ユダヤ教の偉大さは力ではなく慈悲にあり、その聖性は征服ではなく憐れみによって測られます。残酷さの正当化として安全を呼び出すことは、トーラーの倫理をファラオの論理と交換することです。

今日、ピクアハ・ネフェシュとビツェレム・エロヒムを称えることは、モハメド・バハルの命が一パレスチナ人で、障害者で、貧しかったにもかかわらず一神聖であったと肯定することです。それは彼の死が人間の悲劇だけでなく、靈的な失敗であり、我々すべてに存在する神聖な像への裏切りであったことを認めることです。

エピローグ：証言する

モハメド・バハルを思い出すことは、残酷行為にしばしば続く静かな消滅を拒否することです。彼は戦闘員ではなく、脅威でもなく、彼に呼ばれた命令を理解する能力さえありませんでした。彼はダウン症と自閉症の若者で、兵士とその犬が彼の家を恐怖の場に変えたとき、アパートに閉じ込められていきました。彼は命が守られるべきであり、その脆弱性が暴力ではなく慈悲を呼び起こすべき人でした。

彼の殺害はすべての正当化の口実を剥ぎ取り、裸の真実を明らかにします：残酷さは共感が終わる場所で始まり、法の価値は無力者を守るかどうかで測られます。彼の物語は憐れみ以上のものを要求します。それは、このことを可能にしたシステムを直視することを要求します：残酷さを正常化する占領体制、それを許す国際秩序、そして悲劇の繰り返しを許す集団的道徳的疲労。

残るのは記憶する義務です—感傷のジェスチャーとしてではなく、道徳的明確さの要求として。彼の死は歴史の記録に異常としてではなく、警告として属します。障害者の血を流す体を見て何も感じない社会は、過去の文明が破滅に向かって進んだ同じ道に踏み出しました。

彼を思い出すことは、この無関心に逆らって彼の名を語ることです。モハメド・バハル。息子。価値ある命。世界の良心の傷。

参考文献

一次資料およびニュース報道

1. 「モハメド・バハルの殺害。」 ウィキペディア、最終更新2025年。
2. ル・モンド (2024年7月)。「ガザで、イスラエル軍の犬によって殺されたダウン症の若者の苦難。」
3. ハアレツ (2024年7月)。「ダウン症のガザの男性がIDFの攻撃犬によって殺された。」
4. ガーディアン / ARIJ (2025年6月)。「戦争の武器：イスラエルの攻撃犬の使用。」
5. リリーフウェブ / イスラム・リリーフ・ワールドワイド (2024年7月)。「イスラム・リリーフはモハメド・バハルの殺害に心を痛め、調査を求めます。」
6. ダウン症インターナショナル (2024年7月)。「ガザでのモハメド・バハルの死に関する声明。」

人権および法的文書

7. B'Tselem - 占領地の人権のためのイスラエル情報センター (2015)。犬が噛むとき：占領地での軍事目的での犬の使用。
8. HaMoked - 個人の防衛のためのセンター (2019)。拘留中の虐待：オフェルおよびメギド刑務所からの証言。
9. Breaking the Silence (2014-2023)。犬の使用および拘束者の扱いに関する元IDF兵士の証言。
10. Yesh Din - 人権のためのボランティア (2023)。データシート：ヨルダン川西岸でのIDF兵士に対する法執行2019-2023。
11. ヒューマン・ライツ・ウォッチ (2021)。越えられた閾値：イスラエル当局とアパルトヘイトおよび迫害の犯罪。
12. 国連拷問禁止委員会 (CAT/C ISR/CO/5) (2016および2022)。イスラエルの第五および第六定期報告に関する最終所見。
13. 人権高等弁務官事務所 (OHCHR) (2024)。障害者の権利に関する特別報告者の報告。

国際法および条約

14. ジュネーブ条約 (1949) および追加議定書IおよびII (1977)。
15. 国際刑事裁判所のローマ規程 (1998)。
16. 市民的および政治的権利に関する国際規約 (ICCPR) (1966)。
17. 拷問およびその他の残虐な、非人道的または品位を傷つける扱いまたは処罰に関する条約 (CAT) (1984)。
18. 障害者の権利に関する条約 (CRPD) (2006)。
19. 国際法委員会 (2001)。国際的に不法な行為に対する国家の責任に関する条項。

ユダヤの倫理的および神学的資料

20. ヘブライ聖書 / タナフ。創世記1:26-27 – 人類は神の像（ビツェレム・エロヒム）に創造された。
21. タルムード・バブリ、サンヘドリン37a。「一つの命を滅ぼす者は全世界を滅ぼしたも同然。一つの命を救う者は全世界を救ったも同然。」

22. タルムード・バブリ、ヨマ85b。ピクアハ・ネフェシュの原則 – 命を救うことはシャバットでもほぼすべての戒律に優先する。
23. ミシュナー・トーラー、ヒルホット・シャバット2:1 (マイモニデス)。「生命の危険はシャバットに優先する。」
24. ラビ・ジョナサン・サックス (2011)。差異の尊厳：文明の衝突を避ける方法。ロンドン：コンティニュアム。
25. ラビ・アブラハム・ヨシュア・ヘシェル (1965)。預言者たち。ニューヨーク：ハーパー＆ロー – 正義と神聖な像について。

二次分析および文脈

26. 人権のための医師団 - イスラエル (2020)。行間：紛争地帯での医療的怠慢と妨害。
27. アムネスティ・インターナショナル (2023)。イスラエル/OPT：戦争地帯での殺害に対する免責のパターン。
28. 国際刑事裁判所検察官事務所 (2021)。パレスチナ国家の状況：予備調査報告。